SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

新人教師が目指す子どもが能動的に取り組むことができるかかわりの場を設けた授業づくり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 春香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007284

新人教師が目指す子どもが能動的に取り組むことができるかかわりの場を設けた授業づくり

栗田春香

Teaching Methods Developed by Novice English Teachers that Aim to Increase Students' Active Participation trough Interactional Situations

Haruka KURITA

１．問題の所在と目的

不登校や別室登校、発達障がいなど、子どもたちが様々な問題を中学生という思春期に抱えている。しかし、そのような悩みから、学校に来ることができないことで生徒たちが受ける損失というものはとても大きい。中でも、授業を受ける機会が奪われているということは、たくさんのことを学び、吸収し、人間として、社会の一員として成長していく生徒たちにとってとても大きな問題であると考える。また、現場経験のない筆者にとって、授業力の獲得・向上は目下の課題である。

そこで、本研究では、生徒たちが「出てみたい」と思えるような授業づくりをしたいと考え、以下のような目的を立てた。第一に、モデル教師が生徒にとって能動的な授業を行っているという仮定のもと、モデル教師の分析を行う。生徒が能動的に授業に参加することができるようにするために、モデル教師が打っている手立てについて明らかにし、それを先行研究を元に整理する。第二に、モデル教師の良さや特徴を踏まえた上で、生徒たちの能動的な授業参加を目指した授業実践を行う。ビデオ分析や、モデル教師との事後検討、及び生徒たちに記入してもらった振り返りシートの分析をもとに、授業実施の際に取り入れた生徒たちの能動的な参加のための手立ての効果や課題を検証する。

第Ⅰ部　研究Ⅰ　生徒が能動的に授業参加できるモデル教師分析

２．アクションリサーチの期間と方法

2012 年 4 月から 2013 年 1 月にかけて、A 中学校にて週 2 日実習を行った。アシスタントティーチャーの立場として、モデル教師である A 教諭の英語の授業に参与観察し、分析した。第一に、生徒が能動的に参加している場面と考えられる英語教師の授業を逐語録として起こし、それぞれの発言についてラベル付けをし、カテゴリー化する。それらをまとめ、A 教師の英語教師としての生徒たちの能動的な授業への参加をうながす手立てとその特徴を明らかにする。第二に、A 教師の英語教師としての特徴を踏まえ、筆者との授業と比較し、筆者の授業との違いと課題点を見出していく。

３．生徒たちの授業への能動的な参加をうながすモデル教師の特徴

逐語録をとり、A 教諭の表れから、ラベル付けを行った。そのラベルづけの凡例は表 1 のようになっている。また、これらのラベルは、ガードナーの動機づけ理論に基づくと、表 2 のように分類できると考えられる（Gardner, 1985）。

この二つの表から、A 教諭は、例えば語彙力、コミュニケーション能力のような生徒たちにつけたい力として英語の文法理解や発音のために、拡張や繰り返しを行ったり、既存学習と結びつけたりして、

日本語と英語の比較を行っている。このことは、英語を身につけるために必要であり、英語を習得しやすいような手だてがそこにはあると考えられる。つまり、道具的動機づけを行っているのだろう。一方、A 教諭は外国の文化に対して言及することもあった。生徒たちの英語に対する興味・関心を図るものと考えられ、つまり統合的動機づけを行なっていると考えられる。実際、教師が生徒たちに外国の文化について話をしているとき、生徒たちは教師の話に耳を傾けたり、生徒同士でそれについて雑談したり、自分たちであれこれ考え思いを巡らしている様子がある。これは、教師による一方的な授業でなく、生徒との往還を大切にしている授業である。よって、A 教師の良さというのは、外国語を道具として使うために、必要な手立てが豊富であるだけでなく、生徒たちの興味・関心をひきたてるような話題を提供できるところにあるのではないかと考える。以上のように、A 教諭は道具的動機づけと統合的動機づけを授業内で行っているのが特徴と言える。

表 1. ラベルの凡例

ベルの名称	ラベルの内容
①英語による指示	簡単な指示を英語で行うこと。
②生徒への質問	生徒へ問いかけること。
③モデリング	教師が実際に実践し、子どもたちに手本として示すこと。
④環境整備	授業に取り組むために必要な物があるか確認したり、静かになっているか確認したりするなど、クラスの雰囲気を整えること。
⑤課題の明確化	今生徒たちは何を学習し、何について考えなければならないのかといった課題についてしっかりと子どもたちに示すこと。
⑥拡張	一つの事柄から他の事柄へ広げていくこと。
⑦繰り返し	英語のセンテンスなどを復唱すること。
⑧過去との結びつけ	既存学習と現在の学習を関連図けること。
⑨英語と日本語の比較	英語と日本語の文法的・文化的違いについて言及し、比較すること。
⑩外国の文化背景	ある事柄について外国の文化背景から語ること。
⑪受容	生徒の発言や態度を否定せず、受け入れること。
⑫身近なものとの結びつけ	学んでいることを、自分たちの生活や、身の回りのものや事柄を関連図けること。

表 2. 統合的動機づけと道具的動機づけの分類

統合的動機づけ	道具的動機づけ
英語と日本語の比較 外国の文化背景	英語による指示 子どもへの質問 モデリング 環境の整備 課題の明確化 拡張 繰り返し 過去との結びつけ 身近なものとの結びつけ

4．モデル教師の授業と比較を通した筆者の授業の特徴

モデル教師の授業と比較を通した筆者の授業の特徴として次のようなことが挙げられる。

第一に、授業の教材に関することである。A 教諭は長年の経験から、教材を自分のものにすることに長けている。英語の授業は基本的に教科書に沿って授業を展開していくことが多く、A 教諭もまたその通りである。しかし、A 教諭はその教科書を使いながらも、教科書の話に関連づけながら、自分のオリジナルの話を外国の文化や自分の海外での経験や外国人とのかかわりの中から得られた体験などについて話をしている。その様子は他にも海外と日本との密接な関係を示すために、自分の身の回りにある物はどこで作られているかなど、教室に置いてあるサッカーボールを調べさせたり、自分の持っているペンを調べさせたり教室全体を使って日本と外国との関係を身近なことから示していた。そのような話や活動によって、生徒たちが外国の文化や日本と外国との関係、または外国人について疑問に思ったり、興味をもったりしながら A 教諭の話を聞くことができているのだ。また、授業内で生徒たちの集中が途

切れないように、様々な活動を取り入れることができている。例えば、新しい月になった際には、英語での月の言い方について復習する活動を取り入れたりするような季節に応じた活動や、教師が言った日本語や英語を英語や日本語で答えるような小ゲーム、ワークシートを使ったインタビューゲームなど、簡単にその場でできるようなものから、事前に準備して行う活動など、幅広く、引き出しの多さを感じる。それによって、生徒たちは様々な活動を通して、英語を気軽にしゃべったり、聞いたりすることが抵抗なく活発に英語活動に取り組むことができていると感じる。

一方、筆者の授業は教科書の内容を確認するだけの授業になってしまっている。新出の文法事項や単語について確認したり、本文の内容を確認したりするような授業展開である。それは、学習塾で行うようなものと変わりはなく、授業者が話すことの多い一方的な受動的な授業になってしまっている。自分の経験を話すこともないので、生徒たちが「あれ？」と思ったり、「もっと知りたい」と思ったりするような疑問の余地だったり、興味を引き付ける物と言ったものもあまりない。教材への理解も少ないために、オリジナルなものを作ろうとすることはとても困難である。一方で新任教師は教科書の内容をしっかり授業することが大切であるという考え方もあるが、それでも、生徒たちに分かりやすい授業というものを工夫しきれずにいるところである。「分かる授業」でなければ子どもたちの能動的な授業への参加は困難であるので、そこを徹底する必要があると考えられる。

第二に、生徒たちへの対応についてである。A 教諭は、生徒たちが規範を乱す行為をしたり、友だちに対して好ましくない態度をとるときはとても厳しく、教育的愛情を持ってしっかり叱ったりして、「ルール」を重んじている。しかし、基本的には生徒たちの言うことを受容し、認め、価値づけを行っている。筆者が授業へ参与観察しているとき筆者が感じるには、その教師と生徒の関係というものは、教師と生徒と言うよりはむしろ母親と子どものような温かい関係であり、A 教諭はそのような対応を生徒たちに取っているように考えられる。規範に外れていなければ、A 教諭は受け入れてくれるので、生徒たちは授業中に疑問に思ったことや分からないこと、教師の話の感想などを、自由に発言できる。それらの生徒たちの発言を受け止め、授業に活かしていくこともまた、A 教諭はしている。自分の発言や疑問が授業に活かされるため、生徒たちは積極的に授業に参加し、取り組むことができるのだ。

一方、筆者と生徒たちの関係というものは、授業をする際には教育実習生という立場で授業をさせてもらっていたし、生徒と年齢も比較的近いので、生徒と教師というよりはむしろ年の離れた知り合いのお姉さんのような関係である。よって、生徒が授業を盛り上げてくれようとしたり、筆者の話を一生懸命聞いてくれたり、どこか未熟な筆者を「助けよう」というような気持が生徒たちにあるように考えられる。一方、教育実習生と言う立場もあり、生徒に厳しく叱ったり、規則を徹底させることをさせずあやふやにしてしまったりする。そのため、教室での授業環境が整わず、生徒たちも自由になりすぎ授業の学びが確立できないようなときもある。よってそのような環境では生徒たちも授業に集中して取り組めないため、能動的な学びと言うものも困難であるように考えられる。

第三に、生徒同士の関係づくりに関してある。A 教諭は、冒頭の自己開示や学校での生徒の様子や学校の話など、授業とは関係ないことを話しながら、他の生徒との関係を作ったり、結びつけたりしている。また、グループ活動で必然的なかかわりの場を提供し、そこで生徒たちの良さなどを再発見できるようにしていると考えられる。このような生徒同士の関係が良ければグループワークなど活発に抵抗なくできるし、能動的に授業に参加できるのではないのかと考えられる。

一方、筆者の生徒同士の関係づくりというものは、かかわりの場を提供することしかできていない。

そのかかわりの場とは、授業内で敢えて必然的なかかわりの場を設け、その中で生徒たちが言葉を交わし合うというものである。しかし、かかわりの場を提供することは、方法であって目的ではない。よって、生徒同士の関係づくりができるような手立てを、普段の生活だけではなく授業内でもいくつか持っている必要があると考えられる。

第四に、教師としての振る舞い方である。A 教師は指示が明瞭であり、声も大きく、とても堂々としている。授業の進行の仕方も、落ち着いている。教師による指示が明確で、落ち着いていると、生徒たちもリラックスして授業に取り組むことができる。よって、この教師の振る舞いは環境的にも生徒たちを能動的な授業参加を可能とする手立てになっていると考えられると考えられる。

一方、筆者の振る舞いはどこか自信がなく、発問は明瞭さに欠け、何をしようか困惑している様子がある。教師自身が困惑している様子は、生徒たちの不安感をうながしてしまうことになると考えられる。よって、筆者自身が授業の内容や発問を授業前でしっかり考え、イメージすることが自信にもつながるはずなので、授業前の準備をしっかりすることが必要であると考えられる。

第Ⅱ部　研究Ⅱ　生徒が能動的に授業参加できる授業実践

5．アクションリサーチの期間と方法

2012 年 10 月 26 日から 12 月 14 日にかけて本実践を実践した。実践内容は表 3 に示す。実践方法は、A 教諭や大学院で一緒に学んでいる現職教諭（英語科）、大学院の教授から助言・指導を受けながら指導案を作成し、その内容に則って授業を実践した。授業実践後はビデオによる自己省察や、A 教諭との事後検討会を実施し、生徒たちによるアンケート結果やから成果や課題について検討した。

表 3．授業実践表

	授業内容	能動的なかかわりの概要	観点別評価
①	現在分詞・過去分詞を使った後置修飾	○インタビューゲーム	表現の能力
②	関係代名詞を使った後置修飾	○言語獲得に関する導入 ○グループで取り組むかるたゲーム	表現の能力

6．授業実践における成果

（1）教師としての姿勢

教師の振る舞いとして、とくに「視線」という点の改善が見られた（図 1）。教科書や黒板を見る時間ではなく、生徒たちの方を見る時間を延ばすことができた。しかし、授業内に板書したり、教科書を音読したり、準備をしたりするため、常に生徒たちの方を見ることは不可能である。その対応策として、身体や顔だ

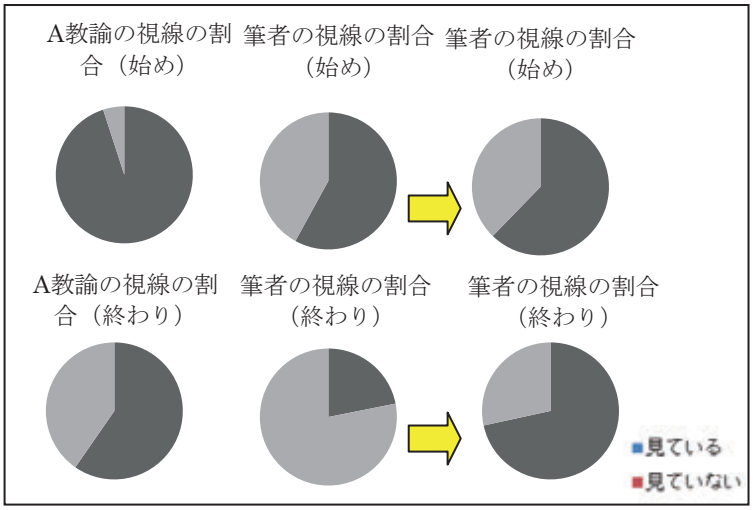


図 1．視線の変化

け生徒たちに向けて視線は他のところをみるように心がけることを行った。これによって、生徒たちの反応や教室内の雰囲気を把握することが可能となり、早急な生徒指導をすることができるため、とても大切な視点であると考える。

（2）能動的な参加をうながす手立て

第一に、能動的な参加をうながす手立てに関しては、生徒たちにとって楽しい活動にできたところが成果として挙げられる。生徒たちが「やってみたい」と思えるような活動が可能となったのだ。また、筆者の授業を「また受けたい」という生徒もいた。これは、自分の授業に「出てみたい」と生徒に思わせることに非常に似ていて、自分が能動的な授業をしたいと考えた根幹にある想いを達成できたと感じている。また、ただ「楽しい」だけでなく、「大変だけど楽しい」と生徒たちにとって感じられる活動ができた。これは、取り組む価値のある活動と捉えることができ、たとえ大変であっても、価値があるものには生徒たちは能動的に授業に取り組むことができるということがわかった。

表 4. 生徒たちの授業を受けた感想

①楽しい活動
• かるたが楽しかった。
• 先生の授業をまた受けたいなと思った。
• かるたのゲームで、すごい頭を使って大変だったけど、楽しくできた。
②分かる授業
• 関係代名詞を使った後置修飾が良く分かった。
• ゲームを通して「英語を学ぶ」ということが実感できた。
③かかわり合う喜び
• みんなで協力して英語やかるたをしたりして、自分の分からなかったところや疑問を発見できたのでよかった。
④導入の工夫
• これからも頑張って英語を勉強していきたい。

第二に、生徒たちが後置修飾についての理解を促進することができた点である。また、同時に英語の学び方も学ぶことができていた。これは、ゲーム感覚で活動に取り組むことが可能となるので、生徒たちのモチベーションがあがり、それによって理解が促進されたのではないかと考えられる。

第三に、仲間とかかわり合うことで、課題が解決される喜びを感じることができる点である。他者と協力して考えていく力は今後の生徒たちにとって必要な力であると考えられるため、これに喜びを感じられる意義は大きいと考える。

最後に、導入の工夫の成果も得られた。「older is faster, younger is better」という話を生徒たちにすることによって、英語を学習する意欲を高めることが可能となった。このような導入の工夫は、それ以降の活動に大きく影響すると考えられるため、その重要性を再認識できた。

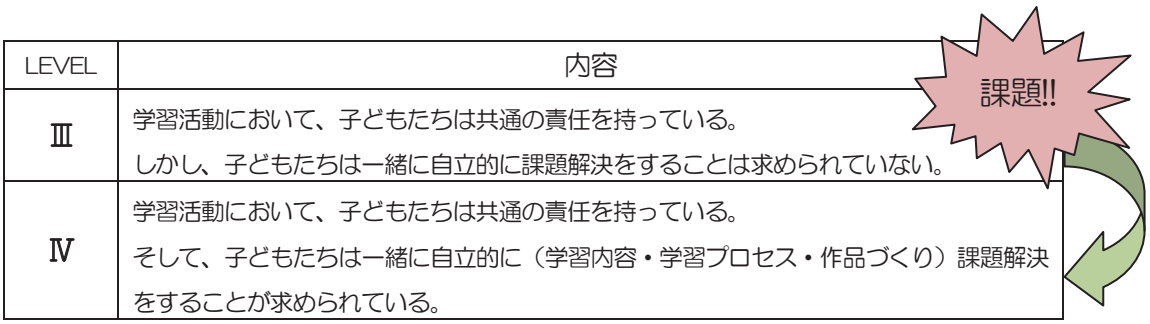
7．授業実践による課題

（1）授業の構成

教科書を使いながらも自分の目指したい授業を作成するということにとても困難さを感じた。教科書を使うことに課題が残った。また、生徒指導に課題が残った。実習生という立場で授業をやらせてもらっているため、普段の生徒との関係性が教師と生徒のような関係とは少し違うため、筆者自身も生徒が好ましくない対応だったときにしっかりと指導できなかった。その結果、活動を行う際にルールを徹底できず、能動的な参加をうながす課題にもなってしまった。

（2）能動的な参加をうながす手立て

かかわりの場での課題設定に課題が残った。つまり、21 世紀型スキルのかかわりのレベルで考えると、一回目の実践ではレベルⅢにとどまり、二回目の実践では、レベルⅣでもグループすべての者に「責任」を課せられていなかった。よって、図 2 から分かるように、レベルⅢからレベルⅣに移行するのに課題が残った。とくに、活動における「責任」というものは非常に大きな課題であり、生徒たちが自分に課せられている「責任」をしっかり把握し、それを果たすためにも、教師が手立てをしっかり立て、生徒たちが意欲・やる気をもって活動に取り組むことができるような、その学年の子どもたちにとって必要で興味がもてるような題材を扱うことの必要性を痛感した。



LEVEL	内容
Ⅲ	学習活動において、子どもたちは共通の責任を持っている。 しかし、子どもたちは一緒に自立的に課題解決をすることは求められていない。
Ⅳ	学習活動において、子どもたちは共通の責任を持っている。 そして、子どもたちは一緒に自立的に（学習内容・学習プロセス・作品づくり）課題解決をすることが求められている。

図 2. 目指す 21 世紀型スキルの協働のレベル

（3）指示の明瞭さ

指示の明瞭さに欠けていた。英語への自信のなさから声が小さく、フレーズを切って指示できなかった。また、繰り返し生徒が指示を理解するまで行えなかった。そのため、生徒たちから以下のような声が上がり、改善する必要がある。

英語があまり聞き取れなかった。

以上のように、成果と課題が得られたが、ここで得られたことは引き続き教師として生徒たちの前に立つ時も考えていかなければならない課題であり、改善しつづけることが必要である。

8．新人教師として生徒たちが能動的に取り組むことができる授業をするために

これまで生徒たちが能動的に取り組むことができる授業をするために、本研究では A 教諭の分析を行い、それを参考に自身による授業実践を行ってきた。それによって、新たな成果や課題が見えてきた。しかし、その研究対象とした生徒たちは、A 中学校が育ててきた生徒であり、今後筆者が担当するであろう生徒とは異なる。また、筆者が行った授業も、A 教諭が 4 月から創り上げてきたクラスの雰囲気があってこそ成り立つものであると考えられる。よって、筆者は今後も新人教師として、クラス作りをしながら、目の前にいる生徒に合った課題や手立てというものを丁寧に考え、試行錯誤しながら「能動的な授業」ということについて引き続き考えていきたい。その自分の課題をひとつひとつ解決しながら、新人教師として自分が目指す教師像に近づいていくよう日々努力していきたい。